

「近未来教育フォーラム2017 Augmented Human 人間拡張への序曲」を開催

デジタルハリウッド株式会社 まなびメディア事業部 細野 康男
デジタルハリウッド株式会社 大学事業部 山口 豪

はじめに

近未来教育フォーラムは、教育機関、自治体・省庁、企業の方々を対象に、デジタルコミュニケーション時代の今後の展望を見据えたデジタルハリウッドの実践的な教育研究の取組を紹介する場として二〇一〇年より開催し、毎年、時流を捉えたテーマを設定している。

今回は「Augmented Human—人間拡張への序曲—」というテーマを掲げ、二〇一七年十一月十六日にデジタルハリウッドで近未来教育フォーラム二〇一七 (<http://www.dhw.co.jp/forum/>) を開催し、総勢一五二名の方々にご来場頂いた。

今回のフォーラムでは、まず自在化技術、身体情報学の研究者である稲見昌彦氏（東京

大学先端科学技術研究センター教授）を招聘し、「自在化身体…身体の未来を展望する」と題する基調講演と学長の杉山知之との対談を通じて、前記テーマについて理解を深めた。次に近未来の教育を見据える上で鍵となる「Technology」 Collaboration」 Academyという観点からのTrackを設定し、各分野の第一線で活躍する有識者と共に、創発的な提言や議論を行った。本稿では、その中で特色あるTrackの概要を以下で紹介する。

【Academy Track1】 デジタルハリウッド教材導入校の本音 〜教員・学生の評価から考える授業 活性化の提案〜

企業の趣旨

デジタルコミュニケーション領域の教育は、

ドラーニングを推進してきた。

これらの動画教材を活用した授業活性化ノウハウをサービス化し、「デジタルハリウッドアカデミー」という名称で二年前から全国展開を開始した。大学や専門学校、教育サービスを提供されている事業会社等、導入校は合計一三校、受講生は一〇〇〇名を超えた。

今回のフォーラムでは、デジタルハリウッドの動画教材開発責任者の石川大樹、外部教育機関等とのアライアンス担当の細野康男より、先述の課題を持つ教員や学校関係者の方々に、導入校からの本音を紹介することで、授業活性の実現性についての議論を行った。

講義内容のポイント

先述のように、動画教材は様々な教育機関で活用されており、受講者の、年齢、性別、



基調講演風景

職業、学習目的などは非常にバリエーションに富んでいる。このような活用下においても、「動画教材を活用した教育により、受講生が短期間で共通目標（基礎スキルの習得）を達成することができた」という意見が多数であり、概ね、教育の有効性が認められている。一方で課題も存在している。特に、全体として共通している課題が、「産業界のニーズに対応できる実践的スキルの習得において、導入校間でまだまだバラつきがある」という点である。これは、例えば、コンテストでの入賞や就業に繋がる成果物を必ずしも制作できていない現状である。導入校の受講生には、デジタルハリウッドの受講生と同様に基礎スキルに裏付けられた実践的スキルが期待されている。これを実現するという課題を解決するためには、受講生の目的意識・興味・心情を引き出しつつ、産業界のニーズとマッチングできるような指導が求められる。そこで、「動画教材そのものの改善」だけではなく、受講生個々の情緒的情報を把握し、適切に対応し、且つ、これらのオペレーションを標準化することが重要になる。そこで、現在、アダプティブラーニングに注力している。

デジタルハリウッドでは、アダプティブラーニングを「受講生個々の学習進捗という定量的情報と目的意識・興味・心情といった情緒的情報の双方を記録し分析することで、目標と学習内容を最適化し、その達成に向けて伴走すること」と定義している。そして、その実践においては、AI活用と対人コミュニケーション



【Academy Track 1】石川大樹（中央）と細野康男（左）

一般的な受験科目のように正解が明確にあるものではない。そのため、デジタルハリウッドでは、社会のニーズを理解しつつ、受講生自らのクリエイティビティを發揮できるような教育を提供することで、個々が目的を持って能動的に学習していける状態にすることを「授業活性化」であると認識している。この「授業活性化」を実現する過程には、「受講生の基礎力のバラつき解消」「各受講生の理解度に合わせた指導」「教員が基礎科目の準備・実施に費やす負荷・時間の軽減」「既存教員では担当できない分野の指導」「基礎科目内容の体系化と教員指導力の標準化」「退学・休学予防」という課題が存在している。これらの解決のために、デジタルハリウッドでは多くの授業を映像教材化して、授業内でそれらを活用して学習を進めていくブレンディッ

ション活用の二つの手法があると考えている。「定量的情報」の把握には、AI活用が有効であり、その導入を検討している。一方で、「情緒的情報」の把握には対人コミュニケーション活用が有効であり、そのオペレーションの標準化を進めている。後者は、具体的には、デジタルコミュニケーション領域の教育に相応しい「学習開始時カウンセリング（目的意識・目標・希望職種・希望スキル・週単位での学習目標時間）」「中間カウンセリング（現在の学習状況・心境の変化・得意部分・悩み、等）」の方法を組織的に開発し、実施検証していく。

このように、デジタルコミュニケーション領域の教育において、様々な背景を持つ受講生が、「動画教材を活用した教育を受講すること

により、短期間で基礎スキルを習得すること」、そして「産業界のニーズに対応できる実践的スキルを習得すること」の双方を実現できるように、「動画教材そのものの改善」と並行して、アダプティブラーニング手法の工夫を以て、再現性のある授業活性ノウハウを開発していく。

【Academy Track2】 認証評価第3ステージにおける 大学評価システムの本質

二〇〇四年度に導入された認証評価制度は、二〇一八年度から第三期を迎える。こうした中、二〇一六年三月に認証評価の細目省令が改正され、第三期認証評価の重点項目に内部質保証が位置付けられた。この様な動きを踏まえ、第三期認証評価の本質を理解すべく、公益財団法人大学基準協会の工藤潤事務局長を招聘し、「大学基準協会による第三期認証評価の変更ポイント―内部質保証の実質化に向けて―」と題する講演会を実施した。

講演会のポイント

工藤氏は、内部質保証の必要性をわが国に対して提唱された第一人者である。その工藤氏より、内部質保証システムを機能させるためには、学生の学習成果の向上、独自の質保証物語の確立、及び質の文化の形成が重要であるとの説明がなされた。その説明のポイントは、以下三点にある。

第一に学習成果の評価に当たっては、直接的評価や間接的評価等の多角的な観点を組み

合わせて検証することが効果的である。第二に各大学が掲げる三つの方針を、大学教育の入口から出口までの流れの質保証の物語として、大学自らの言葉で語れることが大事である。第三に大学の構成員の誰もが、各大学教育の質に対して責任を持つと共に、その改善を自主的に支援する姿勢を持つ文化を各大学内に醸成することが大切である。

前記説明の他に、工藤氏から、第三期認証評価の重要な変更点として、全学的観点からの自己点検・評価の実施方法について、特に全学的教学マネジメントの下でその実施がなされる必要があるとの解説も加えられた。

参加者からの声と大学事業部の今後の企画について

参加者からは、工藤氏の講演により、第三期認証評価の方向性や全学的教学ガバナンス構築の必要性についての理解が深まった等の声が寄せられた。

デジタルハリウッドでは、この講演会をSDの一環として位置づけ、大学事業部の職員が参加した。今後、デジタルハリウッドは、工藤氏の講演内容を踏まえ、内部質保証の更なる実質化に向けた取組みを行っていくと共に、大学教育の質保証・向上に向けて高い関心を払い、教育関係者等の方々にこうした機会を提供していきたいと考えている。

【Technology Track】

【Collaboration Track】の概要

Technology Trackとは、プログラミング

教育の必要性がわが国で高まる中で、「エンジニア不足は解決できるか？ビジネスの未来へプログラミング教育の挑戦」というテーマを設定し、エンジニアとして時代の先頭を走り続ける藤川真一（えふしん）氏と、エンジニア教育で国内を主導し、Microsoft MVPに五年連続で選ばれたGs ACADEMY TOKYO 主席講師の山崎大助氏をパネラーに対談形式でIT産業の未来とIT人材育成のあり方を議論した。

Collaboration Trackでは、小説「下町ロケット」で話題となり、同小説に登場する弁護士モデルである鮫島正洋本大学院特任教授を迎え、「知的財産の力でビジネスを切り拓く『下町ロケット』に学ぶスタートアップの競争力」と題して、知財教育の必要性やビジネスモデル特許等の論点について理解を深めた。

さらに、今回のフォーラムの最後に、デジタルハリウッドのメディアサイエンス研究所所属の研究室発表を同時開催した。

おわりに

デジタルハリウッドでは、今後も大学、大学院、専門学校等の各教育事業において、次世代を担う人材育成に取り組んでいく。近未来教育フォーラムが、実践的な教育研究の取組を定期的に紹介し、また、ご意見を頂く機会となれば幸いである。本件へのお問い合わせは、(ing-info@dh.w.co.jp) また、遠慮なくご連絡頂きたい。 ▽